

「悠久の未来、そして、ことば」 広西大学、広西師範大学：学術フォーラム2010

馬場 良二（文学部）

文学部では、中国広西大学と広西師範大学とで学術フォーラムを開催すべく昨年度から準備をすすめ、9月22日に広西大学で、そして、24日に広西師範大学で実現しました。「悠久の未来、そして、ことば」、このフォーラムのタイトル、テーマです。言葉に関する研究と広西大学、広西師範大学との交流が今後も長く続くことを祈ってつけました。

広西大学は、南寧市にある総合大学で、1928年に創設、現在5万人の学生と4千人の教職員を抱える大きな大学です。

1997年の広西大学外国語学院教授の熊本留学をきっかけに交流がはじまり、1998年から外国語学院日本語科に日本語教育の実習生を受け入れていただいています。2005年にはMOU (Memorandum of Understanding) も締結しました。毎年11月に10日間前後、今までに延べ54名が南寧の地で実習を経験しました。

フォーラムは、9月22日（水）8時半から11時半、外国語学院209教室でおこなわれました。発表者、タイトルは以下のとおりです。

- 馬場良二 日本語らしい音調と聞き取りやすい自己紹介発話
山田 俊 中国ヤオ族の「槃瓠」説話と『八犬伝』－「天命」か「業報」か－
張 厚泉 上海東華大学教授
日本文化を反映させた文法学習－近い将来の日本語教育を目指して
村尾治彦 言葉と認知：認知形態論から見た語形成メカニズムについて
平田淳巳 広西大学外国人教師 古代日本語の条件構文
-万葉集第943番歌の解釈-
五島慶一 芥川龍之介の<翻訳>

広西大学外国語学院日本語科の先生方18名、そして、学部生、大学院生が大

勢いらっしやる中、第1回のフォーラムが無事終了しました。広西大学内外、および、中国内外の日本語日本文学研究者が一堂に会することの素晴らしさを確認し、今後さらに規模を拡大して開催していこうと話していました。

広西師範大学は水墨画のような景色で有名な桂林市にあります。1932年に創立した総合大学で、最初のキャンパスはもとの王宮にあります。

広西師範大学との交流は、当時の外国語学院の日本語教師が熊本県の県費留学生として2004年に来日したことからはじまります。2007年から毎年4日間程度日本語教育の実習団を受け入れていただいている、今までに延べ22名がお世話になりました。

フォーラムは、9月24日(金)8時半から午後1時50分、広西師範大学雁山キャンパス2-219教室でおこなわれました。私たち4人以外の発表は以下のとおりです。発表希望者が多く、1校から2名までの制限を設けたというほどでした。

張 軍 桂林理工大学外国語学院

夏目漱石作品における脇役的人物について

—『明暗』の吉川夫人をめぐる—

張 云云 広西師範大学外国語学院 城之崎にての空間表象

曾 文華 桂林理工大学外国語学院

江戸時代における「忠」の思想—「忠臣蔵」を例として

韋 登山 桂林旅遊高等専門学校外国語学部 《広西ガイド》

楊 勇 広西師範大学外国語学院

接続助詞「から」と「ので」の使い分けへの再考察

広西壮族自治区の区都である南寧市には広西大学にしか日本語科がありませんが、桂林市では広西師範大学、桂林理工大学、桂林旅遊高等専門学校の3大学に日本語科があります。これら3大学の研究者が一堂に会することができました。

同じ広西壮族自治区ではあっても、南寧市から桂林市へは特急列車で5時間かかります。広州での航空機乗り換えなどもあって非常にハードなスケジュールでしたが、その甲斐のある実りの大きい中国訪問でした。

桂林旅遊高等専門学校の韋先生のご発表は、音声案内付きの映像でした。以下

に、口頭発表すべての概要をかかげます。



日本語らしい音調と聞き取りやすい 自己紹介発話

馬場 良二



ロシアの言語学者で、構造主義で知られるプラハ学派の Nikolaj Sergejevič Trubeckoj はその著 *Grundzüge der Phonologie* で、/p/, /k/, /t/ などの分節的なものも、声調やアクセントなどの超分節的なものも、それぞれを音韻、音素としている。そして、その音韻の機能には、kulminative Funktion (頂点的機能)、delimitative Funktion (限界的機能)、distinktive Funktion (弁別的機能) の三つがある。頂点的機能というのは発話の中にいくつの言語要素が含まれているか、発話の中に含まれている言語要素のまとまりを示す機能であり、限界的機能とは言語要素間の境界を示す、つまり、要素と要素とを切り分けて示す機能、そして、弁別的機能とは意味を弁別する機能である。

ここでは、とくに文の音調の限界的機能と頂点的機能とを活用し、日本語らしい音調で聞き取りやすい自己紹介発話をする方法について考察する。

韓国語話者、中国語話者の日本語学習者が発話する「はじめまして。氏名です。どうぞよろしく。」という音声をデジタル録音機に録音し、音声分析をした。

韓国語話者の発音では、氏名部分が「ジョン ジュン チョル」のような音調となっている。これは、この話者が日本人の発音は低くはじまって徐々に高くなり、低く終わるということを何となく知っているからであろう。この話者の方言にはアクセントがあり、その方言では「전 준 철」のようなアクセントである。そして、「철」と子音でとじる1音節を、母音を挿入して「チョル」と2音節で発音する工夫もしている。が、「ジュンチョル」というように音節の中で音調を変化させることはしていない。韓国語では音節の中で音調を変化させることがないからである。

中国語話者が発音した氏名部分の音調は「オー エンケー」であり、この「ケー」は中国語での「Wáng Yán Qíng」の影響ではないかと思われる。

姓、名ともに頭高で「ジョン ジュンチョル」、「オー エンケー」と発音するよ

うに指示し、話者そのままの発音、「ジョン ジュン チョル」、「オー エンケー」
とくらべてみる。すると、前者の方が姓と名とが分かれて聞こえ、聞き取りやすい。これは、音調という「音素」の限界的機能と頂点的機能とが力を発揮し、姓、名それぞれが独立した言語形式であることを主張、また、両者の境界が明確になるからである。

日本語の名詞の語アクセントは自由度が高く、「その語の拍数+1」のパターンがある。しかし、固有名詞の場合はパターンに限られ、「あき子、よし子、みち子」など、3拍で「子」でおわる名はすべて頭高、「あけ美、よし美、こと美」など「美」でおわる名はすべて平板である。男性の名前では、「タカシ」「リョウジ」など、3拍で「ジ」「シ」でおわっているものは頭高、「ハルヒコ」のように「ヒコ」でおわる名はその「ヒコ」の直前にタキがくる（「ハ[↑]ルヒコ」）。

日本語のアクセント体系にのっとると、外国人の氏名の音調のパターンはかぎられる。氏名全体をあわせて一つの中高（「オー エンケー」）と、姓、名それぞれを頭高で発音するもの（「オー エンケー」）とである。どちらであっても日本語としては正しいのだが、より聞き取りやすいのは後者である。

音韻には、頂点的機能、限界的機能、弁別的機能があり、日本語の音調にも限界的機能、言語要素を切り分ける機能がある。日本語の学習者は自分の名前を名乗るとき、自分なりに工夫しているが、音調での工夫は簡単だ。姓、名ともに頭高で発音すればいい。自己紹介のとき、姓、名をともに頭高で力強く発音することによってコミュニケーション能力を高めることができる。

中国ヤオ族の「槃瓠」説話と『八犬伝』 —「天命」か「業報」か—

山田 俊



清朝に編纂された『広西通志』『貴州通志』等の地理書を見ると、広西地区の異民族は、自らの祖先が「槃瓠」であると考えていたことが分かる。この「槃瓠」とは、古の帝王・讐の老婦人の耳から生まれた繭状の物体が成長し犬となったものの名である。最初期の「槃瓠」説話を載せる晋の干宝『捜神記』を見ると、敵の侵略に悩んでいた「王」が、敵をたおせば褒美に我が娘を嫁にやると、戯れにした口約束を信じ、「槃瓠」は敵王を倒してしまう。悩んだあげく、娘自身の説得もあり、自らの娘が犬と夫婦となるのは「天命」であると王は諦める。そして、「槃瓠」夫婦が生んだ六男六女が少数民族の祖先となっていく、と語られている。

この説話で重要なのは、「王」の娘が自ら父王に対して「これは天命がこのようにさせたのだ。そうでなければ、どうして犬の知恵や力で成し遂げられることであろうか」と述べている点であり、又、「天命」を受けた存在だからこそ、「槃瓠」の子孫である異民族は漢民族の「律」には拘束されないのだ、と述べている点でもある。要するに、『捜神記』に見られる「槃瓠」説話は、異民族と漢民族の違いを「天命」に基づくものと捉え、「天命」の前では両者は完全に平等であると説かれているのである。

ところが、時代が下り、范曄『後漢書』が引く「槃瓠」説話では、この「天命」の概念が完全に削除されている。その結果、異民族がその生活を維持出来ているのは、漢民族の庇護を受けているからとされ、両者の力関係に置き換えられているのである。『後漢書』以後の「槃瓠」説話はすべて『後漢書』型となっている。

日本の滝沢馬琴『南総里見八犬伝』が、忠犬八房と伏姫の件を書く際に「槃瓠」説話を下敷きにしたことは、自らその「序」で述べているが、馬琴が目にした「槃瓠」説話は『後漢書』型のものである。従って、そこに「天命」の語は見られなかったのである。人間の娘と犬が夫婦になるという異類婚姻譚に説得力をもたせるために、『捜神記』は「天命」の概念を用いたのだが、それを目撃しなかった馬琴は、

それに代わって「業報」の概念を導入した。わが娘を犬に嫁がせる羽目になったのは、全て「前世の業報」のためとしたのである。それは、一度は許した毒婦玉梓を家臣の忠言により改めて処刑する決断を下した優柔不断な主君義実に対し、玉梓が「孫子の代まで畜生道に落とし、この世の煩惱の犬にしてやる」と呪詛をかけて果てた、その「業報」なのである。「天命」に代わって導入された「業報」の概念が、『八犬伝』のストーリー展開に大きく関わっていることが分かる。

「槃瓠」説話の本来の内容は「天命」の思想を根底に持ち、それは、人と動物の違いを超えた思想を持ち、それが漢民族と異民族の間の平等を支えていた。その後、漢民族と異民族の上下関係に基づいて「槃瓠」説話の内容が改められると、「天命」の概念は削られてしまった。一方、日本では、「天命」の思想の無い「槃瓠」説話を目にした滝沢馬琴が、『八犬伝』の話を構築するために新たに取り込んだのが、仏教的な「業報」の概念であったのである。同じく「槃瓠」説話を基盤としながらも、中国と日本とでは、それぞれの状況に応じた受容のされ方の違いをそこに伺うことが出来るであろう。

日本文化を反映させた文法学習 — 「V (テ形) カラ」 を例として

東華大学外語学院日本語学科 張 厚泉

一、はじめに

本論は、日本人が「朝ご飯を食べてから歯を磨く」か、それとも「歯を磨いてから朝ご飯を食べる」かという問題を検証し、「V (テ形) カラ」という表現形式を教えるときに、いかに日本文化を取り入れるか、比較の視点で試みた。

二、「V (テ形) カラ」という文法機能

「V (テ形) カラ」は、「V (過去形) タアトデ」や「V (辞書形) マエニ」と同じ、二つ動作の前後の時間関係を表す初級の表現形式である。本論は、人民教育出版社 (中国) が刊行されている二つの教材を用いて、比較の視点から、「V (テ形) カラ」の導入プロセスを検証し、初級の文法学習の段階で積極的に日本文化を文法表現に取り入れるべきことを提言した。

『新版 中日交流 標準日本語』初級上の第 14 課、15 課では、「**昼ご飯を食べてから**出かけます」のように、「V (テ形) カラ」の 5 つの例文とも日本文化や風習を反映していない。一方、『新日本語教程』初級 (1) の第 15 課と 16 課では、「日本へ**来てから**、テレビを見ておぼえました」など、基本的な例文もあれば、「除夜の鐘をきいて、年越しそばを**食べてから**、近くの神社へ初詣に行きます」のように、日本文化を反映させた工夫が認められた。

三、日本人は「朝ご飯を食べてから歯を磨く」か

中国人は「朝起きて、歯を磨いてから朝ご飯を食べる」のがほとんどだが、日本人は「歯を磨く」のと「朝ご飯を食べる」のと、どちらが先か、意見が分かれている。本論はこの問題を明らかにするため、聞き取り調査、公的な活字資料の調査、アンケート調査、自衛隊員の生活習慣の調査を行い、一つの傾向を見出すことができた。

東京の会社員は「朝ご飯を食べてから歯を磨く」スタイルが多かったのに対して、京都の老舗旅館の仲居さんなどは、躊躇なく「歯を磨いてから朝ご飯を食べ

る」という。

大学の教員や医者などは、「朝ご飯を食べてから歯を磨く」のほうが大方で、中には「朝、まずうがいをして、朝ご飯を食べてから歯を磨く」方も稀にいる。

公的な活字資料として、歯科病院の問診表の多くは、歯磨きの時間の問いに「朝食後」があっても、「朝食前」の設定がない。『英語絵事典』（PHP 研究所 2006 年）という子ども絵本の目次では、「朝ごはんをたべよう！」、「歯をみがこう！」の順になっている。保育園の「園だより」にも、「食後の歯磨き」は「朝の洗顔や朝食」の後になっているのが興味深いところである。

「FM山口」のアンケートは、「基本的に朝食が先」が 69.37% で、アサヒビールのハピ研が実施した「いつ歯を磨く？」アンケートは、「朝ごはんの後」が 64.9% という結果が得られている。さらに、防衛省・自衛隊のホームページで「ある隊員の一日」でも、「食後は必ず歯磨きを！（AM 06：50）」で示されたように、「朝ご飯を食べてから歯を磨く」自衛隊員の生活様子が伺える。

このように、時代の差、地域の差、職業の差、知識の差があるにしても、「朝ご飯を食べてから歯を磨く日本人が多い」という傾向がくっきり見えてきた。

四、おわりに

文化は言葉を介して流れているものである。一昔、歯磨き粉の CM で「歯磨き後にも、食べ物の味が変わらない」といったキャッチフレーズがあったが、歯磨きが普及された今日では、どこかへ消えてしまった。社会の変化によって、人々の生活習慣が変わり、文化にも影響を与えた。

「朝ご飯を食べてから歯を磨く」という習慣が、多くの日本人の日常生活に定着しつつある中で、初級日本語文法を教えるときに、「たいていの日本人は、朝ご飯を食べてから歯を磨く」のように、日本文化を反映させた形で教えれば、学習者も「V（テ形）カラ」という表現形式を習うと同時に、日本人の生活習慣や文化も自ずと知ることができ、異文化コミュニケーション能力を高めることにつながると期待できる。

参考文献

国際交流基金・日本国際教育協会（2002）『日本語能力試験 出題基準【改訂版】』凡人社
人民教育出版社・光村図書（2005）『新版 中日交流 標準日本語 初級（上下）』人民教育出版社
張厚泉・許小明（2009）『新日本語教程 初級（1）（2）』人民教育出版社

言葉と認知：認知形態論から見た 語形成メカニズムについて —名詞化接辞「-かけ」を事例に—



村尾 治彦

(1) のような、動詞派生名詞「-かけ」の直後に「の」を伴って他の名詞を修飾する表現はいわゆる「かけ」名詞構文と呼ばれる。

(1) a. 読みかけの本 b. 腐りかけのリンゴ

従来の研究では Vendler (1967) の動詞 4 分類や非対格仮説による自動詞の 2 分類に基づき、「かけ」名詞構文に生起する動詞のタイプの観点から同構文の成立条件が検討されているが、多くの反例となる動詞が存在する。それに対して、本発表では、認知言語学の視点に立って、言語の意味や文法的振る舞いは、眼前の状況をそのまま客観的に映し出したものではなく、それを人間（認知主体）がどう捉えるかという「捉え方」（Construal (cf. Langacker 2008)) を反映するという考え方を導入して分析を行う。

「読みかけの本」「腐りかけのリンゴ」などは行為や出来事が一時停止しているか (1a)、内実は刻一刻と変化過程が進行しており、完全に停止しているわけではないが、変化過程がゆっくりであるため、見た目は停止しているように見えるものである (1b)。このような状況は、現実はどうであれ、カメラで撮った 1 枚の静止画像で表されるような、「停止状態」として非常に認知しやすいものである。

以下 (2) で使われている「着く」「こぼれる」などは、一方、時間幅のない瞬間的な出来事を表す動詞が使われているものは、一時的な状態として、1 枚の静止画像のように捉えるのは難しいため、「かけ」名詞構文として通常は非文となる。

(2) a. *駅に着きかけの電車 b. *こぼれかけのジュース

しかし、本稿では「焦点シフト認知」と「超高速撮影カメラ的認知」の 2 つの認知処理が可能な場合、同じ時間幅のない瞬間的な事象を表す動詞でも「かけ」名詞構文で使用できると考える。

(3) は「焦点シフト認知」で捉えた場合である。

(3) a. 死にかけの金魚 (死にかけの金魚がアップアップしながらもがいていた。)

b. 落ちかけのバス (ゆらゆらして崖から落ちかけのバスから間一髪抜け出した。)

(3) における、「生き物が死ぬ」「バスが落ちる」という出来事自体は瞬間的なもので、時間幅がないので一時的な状態として静止画像のように捉えにくい。しかし、死んだり落ちたりすることが起こる前には一般にそれに向かって進む準備的な段階が存在する。この段階は時間幅のあるものであるが、通常前景化されず背景に追いやられ目立たなくなっている。「かけ」名詞構文に使用されたときは、この時間幅のある準備段階に焦点をシフトさせることで、前景化させる。この部分は、時間幅もあり、1枚の静止画像のように捉えやすくなる。そして死んだり、落ちたりする出来事に向かっていて途中の段階であることが示される。

(4) は「超高速撮影カメラ的認知」の事例である。

(4) まだ完全には停車していない、駅に着きかけの電車のドアが急に開いて、乗客が数十人プラットホームになだれ落ちた。

(高見・久野 2006:86)

駅に着くという出来事は瞬間的で時間幅がなく、一時停止状態として捉えにくいものである。また、駅に着く前の段階も比較的早い電車の動きを一時的な静止画像として捉えるのは難しいため、(3) のように、焦点シフトをして捉え直すこともできない。しかし、時間幅のない瞬間的な事象でも出来事が成立する瞬間を超高速撮影カメラで一枚の写真に取って見ると、その途中の一時的な段階として見ることができる。(4) の例は、電車が駅に着く瞬間をあたかも超高速カメラで静止した状態のように主観的に捉え、それを1枚の静止画像として心の中で思い描くという見方が反映されている。

今まで見てきた例を比較すると、(1a) から (1b)、(3) (4) へ行くにつれて、一時的な静止状態として捉えることを出来事そのものの特性からではなく、それを捉える認知主体の心的働きに依存する度合いが強まっていくと言える。

以上のように、表される状況がカメラで捉えた写真のような固定された画像として捉えやすいものほど、成立の途中過程のものとして認知しやすくなり、「かけ」名詞構文として成立しやすくなる。時間幅を持ち、完結点がある出来事が最もこの条件にあう。この捉え方が認知的に自然にできない状況の場合は、認知主体が主体的にかつ心理的に働きかけて、あたかも静止画像のように捉えることで「かけ」名詞構文として成立できる。

古代日本語の条件構文 -万葉集第 963 番歌の解釈-

広西大学外国語学院日本語科 平田 淳巳

1. 問題歌

玉藻刈る辛荷の島に島廻する鶺にしもあれや家思はざらむ (六・943)

問題歌中の「ウニシモアレヤイヘオモハザラム」は、「～已然形+ヤ～ム」という形式を持っている。文法的に考えて、当該部分は「順接仮定条件の疑問」で解釈すべきだと考えられる。

2. 従來說と問題点

従來說では、この「～已然形+ヤ～ム」を「順接確定条件の疑問」とであると説明されている。これをあてはめると、問題歌の解釈は、「(私は) 鶺でもあるから家を恋しく思わないのだろうか」となる。

問題歌 943 番歌は、先行する長歌 942 番歌の第一短歌であるが、長歌 942 番では、「我」がひっきりなしに家のことを恋しく思いながら旅を続けている様子が歌われている。万葉集における長歌と短歌の関係の一般的なありかたからすれば、943 番歌は、先行する長歌 942 番歌と同様に、家を恋しく思っているとい内容になっているのが自然である。

3. 活用語未然形と助動詞ム

助動詞ムは、いまだ起こっていない事態を推量、予想、予測する場合に用いられ、また、ムが要求する活用語未然形は文法的に「語以前」の形態だと考えられている。

従って、問題歌の「家思はざらむ」の場合も、「家を思わない」ことも既定の事態であるとは考えられない。つまり「家思はざら」は、文の成分以前の形式であり、この段階では、この形式によって表現される事態の既定・未定は保留されており、そこに助動詞ムが接続することによって、「家思はざら」が話し手にとって断

定できない推量すべき事態、つまり未定の事態が表現されていると考えられる。

4. 係助詞と接続助詞バを用いた条件文

万葉集には、「～已然形＋係助詞～連体形（コソの場合は已然形）。」形式のほかにも、「已然形 or 未然形＋接続助詞バ＋係助詞バ～連体形（已然形）。」という形式もある。これらをみると、「～已然形＋バ＋係助詞～連体形（已然形）。」の場合、つまり、前件が確定条件の場合は後件が既定の事態、反対に、「～未然形＋バ＋係助詞～連体形（已然形）」の場合、つまり前件が仮定条件の場合は後件が未定の事態を表している。

5. 結論

4. から、係助詞が使用され、かつ助動詞ムで終止している場合、条件文の前後件には、「確定 - 既定」「仮定 - 未定」という呼応関係を認めることができる。従って、3. より、問題歌 943 の後件は「未定」だと考えられるので、前件は仮定条件「鵜ででもあったら家を思わないだろうか」と解釈すべきだと考えられる。

以上

芥川龍之介の〈翻訳〉

—言語間の変換とその不可能性が紡ぐ〈物語〉—

五島 慶一



芥川龍之介「南京の基督」（大正九〔一九二〇〕年七月『中央公論』）は日本語で書かれたものながら、作中の設定上、会話は総て「支那語」で行われている（ことになっている）。つまり、小説の構造から見ると、作中での金花と朋輩の会話・彼女の祈禱や思考などの言語行為は総て「支那語」によるものであるが、それを作中機能としての（肉体を持って実在するものではない）語り手が日本語に〈翻訳〉して読者に伝えているのだと考えることができる。更に言えば、この作品世界内で通用する唯一の言語、言わば通用語が「支那語」であるという状況がある。これは同作の設定の問題、金花を中心にその室内のみで話が進行し、語り手が常にその場所から離れないということから派生してきているのが、加えてここには、語り手による、「支那語」しか〈翻訳〉しないという、ある意味偏向した態度が指摘される。そしてそのあり方こそが、この作品の構造を規定する要となっているのである。

具体的には、第一節の後半で唐突に金花の部屋にやってきた「不思議な外国人」が何者であるのか、彼は金花の病を癒すために「一夜南京に降つた基督」（第二節までで示される、金花の信じる「奇蹟」の〈物語〉^①）なのか、それとも金花から病気を移された単なる「無頼な混血児」（第三節で示される、「若い日本の旅行家」が「独り考へてゐ」ること^②）でしかないのか。一見^②の方が蓋然性が高いように見えるかもしれないが、問題は寧ろ語り手がそれに対して決定的な根拠を作中に準備せず、むしろどちらの〈物語〉（それぞれの人物の視点からする解釈）も成立するような態度を敢えて採っているという点にある。

まず、密室のドラマとしての設定。語り手は常に金花のもとから離れないため、そこにやって来た者の素性を、その外部で明らかにすることができない。加えて、先述したような語り手の作り出した言語的状况が要因として重なる。第一節での金花と「不思議な外国人」のやり取り、その際「支那語」によって発せられた金花の台詞「何か御用ですか。」は、そのように日本語に移されて読者の前に提示さ

れているものの、「外国人」の発した「何か外国語」は、「何やら意味のわからない」ものとしてそのまま放置されている。彼は作中通用語としての「支那語はわからない」ために、作中に自らの視点からする〈物語〉を持つ主体 (subject) として立つことができない。一方で、そんな彼を客体 (object) として眼差す、(一方は「覚束ない」ながら)「支那語」を話し、(テキスト表記言語である)日本語で考えることのできる「日本人旅行家」と金花という二つの主体は、対立的な①②二つの〈物語〉をそれぞれ提示し、正にそのことによって(単なるファンタジーでもなく、またどんでん返しの暴露だけでもないものとして)この小説は成立している。何より重要なのは、そうした状況を作り出しているのが、語り手にほかならないということだ。

言語間が完全に一対一対応していない以上、翻訳という作業には、常にそこに解釈と取捨選択の作用が働いている。あるいはある種の芥川作品から見えてくるのは、言語による理想的な交流関係(世間で所謂「コミュニケーション」)に対する、原理的な不信感だったのかも知れない。そのことは、単一言語の中では意識されにくく、時にはその問題は(仮に気づいたとしても)なかったことにされることもあるが、どうしても〈翻訳〉を必然とせざるを得ないような、異言語との接触を設定するとそこに自ずから浮かび上がってくる。それを創作の論理の中で示した一例として、この「南京の基督」を位置づけることができるのではないか。

附「南京の基督」本文の引用は『芥川龍之介全集』第六卷(岩波書店一九九六・四)に拠った。また、発表当日は、上記内容に加えて、会場が中国であること、及びタイトルに「翻訳」の語をつけたことから、近年の中国(語)での芥川作品翻訳状況(既に全五巻の全集がある)に関しても言及した。そのことを含め、最新のアジア諸国での芥川研究動向について、国際芥川龍之介学会編『芥川龍之介研究』第四号(本年内刊行予定)に報告が載る予定である。

夏目漱石作品における脇役的人物について — 『明暗』の吉川夫人をめぐる

桂林理工大学外国語学院 張 軍

中島国彦の統計「漱石作中人物事典」(『夏目漱石事典』三好行雄編、学燈社、平成二年七月)に依ると、漱石作品中の登場人物は百人を超えている。主要人物以外には、大勢の脇役的人物がさまざまな役割を果たしている。生き生きしている人物もいるし、非常に興味深い人物もいると考えられる。

先行論文では、脇役的人物についての集中的な分析があまり多くない。それでは作品を全体的に理解するのに対して欠陥があると考えているので、そのことがこの小論を書く動機になったのである。小論は『明暗』の吉川夫人という脇役的人物を視点として、彼女の周囲に絡んでいる人間関係から着手し、その性格や望み、そしてその行動を考察することによって作品を読み直している。角度を変換して見れば、その作品についての理解がさらに深くできるであろうと考えられる。

具体的に言えば、『明暗』の研究は津田やお延、清子などの主要人物についての分析が多かったけれども、吉川夫人についての分析は少ない。従来吉川夫人についての論述は以下のようなものがある。片山祐子の「『明暗』吉川夫人論」(『古典研究』、一九八四・三)と申賢周の「夏目漱石の『明暗』論——吉川夫人・天探女——」(『言語と文芸』、一九九四・二)である。

しかし、『明暗』の吉川夫人は、その作品中にかなり重要な役割を果たしていると考えられる。吉川夫人は小説全体において非常に重要な地位にあって、主人公のほとんどの大事件に関係者として存在している。岡崎義恵が、『漱石と則天去私』(宝文館出版、一九六八・一二)の中で、吉川夫人は「狂言回しのやうである」と評した通り、このような重要な人物を分析しないと、作品研究としては、不完全であろう。

『明暗』は吉川夫人によって「明」と「暗」の両世界に分けられる。「明」の世界では、津田夫婦や清子などの主要人物が日常の生活中での喜怒哀楽を示したが、「暗」の世界では、吉川夫人は自分の王国を主宰していることが分かったのである。

すなわち「明」の世界では、吉川夫人は津田夫婦や岡本、清子などの人物を優しく世話しているが、実は自分の目的がある。その目的は自分の周囲に人脈網を築き上げることである。さらに言えば、吉川夫人は「暗」の世界で、自分の王国をつくっている。それに自分の目的を達成するために媒酌などのさまざまな手段をうまく使って動いている。そして自分の目的を実現するところで、邪魔になっているお延に対して、情け容赦もなく罰しようとする。

吉川夫人は金銭や時間の余裕があり、ハイカラな上層社会人物であり、利己主義の偽善家である。彼女は他人を利用するだけでなく、また他人をコントロールすることにも長けていた。吉川夫人は、「媒酌人」や「親を代行する」などの手段で完全に津田を把握している。津田の新妻お延が服従しないので、吉川夫人はお延を罰しようとする。そして周囲の人々を利用して。お秀、藤井、岡本、小林、また津田と清子を手駒にしてお延を罰する。作品全体から見ると、吉川夫人はまるで自分のつくった王国の女王のように、自分の領民を充分に動かして敵を懲罰するよう感じられる。吉川夫人は、他人をコントロールする典型的な人物ではないかと考えられる。

勿論、現実社会では、夏目漱石は吉川夫人のような人物に対して批判的な態度を持っている。小論の結論として、脇役的人物は実際に作品の中で非常に重要な役割を果たしていることが言える。夏目漱石はこのような脇役的人物を造型し、それを通じて自分の「則天去私」の思想を読者に伝えようという作者の考えは、その人物によって充分に読者に伝えられたと考えられる。

参考文献

- 1 鳥井正晴・藤井淑禎編『明暗』（『漱石作品論集成第十二巻』桜楓社、一九九一・一一）
- 2 『漱石全集』（岩波書店、全十七巻・別巻一・一九六五・十二～一九七六・四）

江戸時代における「忠・孝」思想の特徴 —主に「忠臣蔵」を例として

桂林理工大学外国語学部 曾 文華

キーワード：江戸時代 忠 忠臣蔵 主従関係

内容概況

元禄 14 年に赤穂の 47 人の義士が亡君のために、名誉と家族を犠牲にして復讐してから、切腹した「赤穂事件」が起こり、その後「忠臣蔵」に劇化された。主君にその上のない忠誠を持った義士達は忠臣と称され、日本の忠義の化身となった。本論では、将軍—大名—一般武士の三重構造からなった主従関係から着手して、幕藩体制の下での「忠」の構造を検討した。

江戸時代に、主君の支配が絶対的な優位が確立されて、上級の主君に対する絶対的な服従は武士の身分又地位を保障するための手段となった。だから、そういう時代背景の下で、生じた「忠臣蔵」の中では、一般武士は自分と直接的な主従関係を結んでいる大名に対する、絶対的な服従が「忠」であると主張した。しかし、主君の過ちを正し、大名の奴隷にならないように、江戸時代では、封禄と官僚制度において主君の専制を排する内容が作られて、一般武士の個人性と自主性を保障していた。

将軍は日本全土に対する支配者として君臨し、幕府の持つ国家権力は日本全土に権威を持っている。けれども、江戸時代に、もっとも基本的な関係は主従制的関係である。一般武士は幕府の将軍に対して、憚りを持っているが、自分と直接的な主従関係を結ばれていないので、「忠」を尽くす対象から外された。そういう意識に駆られ、徒党を組んで行動することが武家諸法度で禁じられ、幕府への抵抗と思われる懼れがあるにもかかわらず、義士たちは敢えて 47 人の復讐団を組んで、吉良家に対して仇討ちしたわけである。

将軍と大名の間で、その主従関係が誓言と政治制度に基づいた拘束なので、将軍の意命は公式的には絶対のものとして尊重されたが、大名は実際の政治の中で高い

自立性を持っていた。大名側はその規定を遵守する限り、それを超えて恣意的に処罰されたり、不利益を蒙るといったことは原則的に避けられるのである。また、將軍・諸大名の双方の支配と服従の関係は当時の政治制度よりも保障されている。

江戸時代の忠を尽くす対象は多次的形態を展示している。その原因としては、江戸時代の基本的な関係は「幕藩体制」に基づいた主従制的関係で、その主従制度は武士の身分と生活の源に関わっているからである。大名と一般武士の間で主従関係が結ばれたから、一般武士にとって、自分に恩恵と保護を授けた大名に忠を尽くすべきである。自分と間接的に関係を結ぶ日本全土に権威を持っている国家の代表としての幕府に対しては、恐れと憚りを持っているが、忠を尽くす意識がない。將軍—大名の間にも主従関係より結び付けられて、大名は幕府の將軍に忠を尽くすことが求められていた。

その主従関係で結ばれた「忠」の特徴は主君への絶対的な服従と無条件の献身が求められても、臣下が主君の利益を背かない前提で自己の独立性を保ったと言える。

接続助詞「から」と「ので」の使い分けへの再考察

広西師範大学外国語学院 楊 勇

キーワード：接続助詞、「から」、「ので」、使い分け

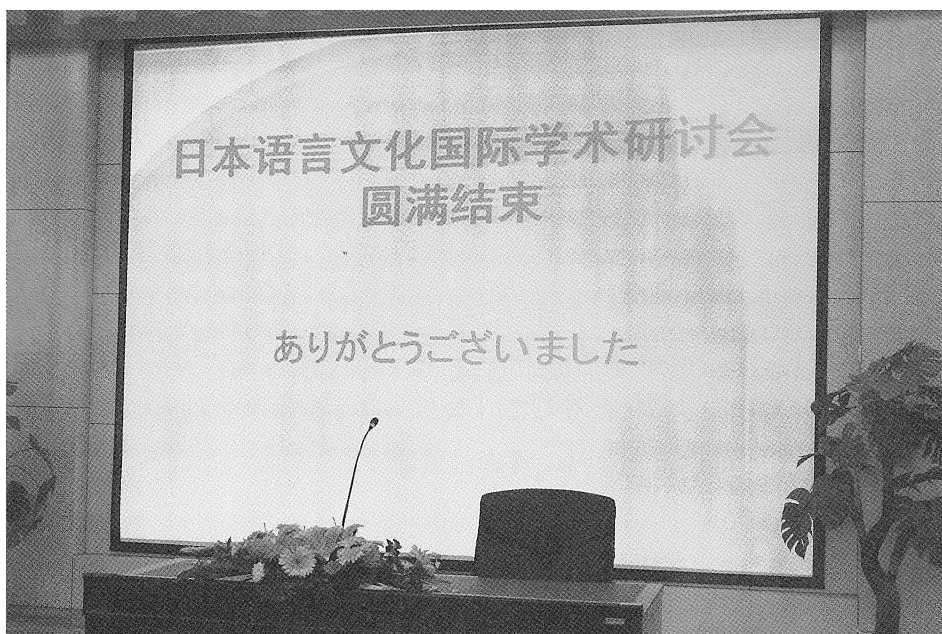
要旨

本研究は、接続助詞「から」と「ので」の使い分けについて、(1)「ので」は、「から」のように「事態の原因・理由」「モダリティ的態度の根拠」の両方を表すことができるかどうか、(2) どうして「から」はくだけた会話文によく使われるのに対して、「ので」は地の文などの書き言葉に多用されるのだろうか、(3) どうして会話文では「から」はくだけた表現になるのに対して、「ので」は丁寧な表現になるのだろうか、という三つの問題点を分析したものである。

本研究では、まず、先行研究を踏まえ、問題点をしぼった上で、アンケート調査を行った。そして、アンケート調査の結果をもとに言語事実にして、「から」「の

で」を使用する背後の論理を追究した：(1)「ので」も、「から」のように「事態の原因・理由」「モダリティ的態度の根拠」の両方を表すことができるが、そのニュアンスが違う；(2)「から」は、物事の共有の情報に基づく、陳述性の高い発話で、くだけた会話文によく使われるのに対して、「ので」は、物事の背後の事情を説明する、陳述性の低い表現で、書き言葉に多用される；(3) 会話文では、「から」は陳述性の高い発話で自己主張がましいので、常体表現に馴染むが、「ので」は陳述性が低いので、敬体表現に照応する丁寧な表現になるのである。

本研究では接続助詞「から」「ので」を使用する背後の論理から両者の使い分けを確認してみた：(1) 会話文では、「から」が用いられやすく、書き言葉では「ので」がもちいられやすい。(2) 常体の会話文では、「から」が用いられやすく、敬体の会話文では、「ので」が用いられやすい。(3) 話し手は聞き手と共有の情報に基づいて発話する場合は、「から」が用いられやすく、話し手は背後の情報を聞き手に届ける発話の場合は、「ので」が用いられやすい。(4) 「モダリティ的態度の根拠」を表す常体表現の場合は、「から」が用いられやすく、「モダリティ的態度の根拠」を表す敬体表現の場合は、「ので」が用いられやすい。(5) 「事態の原因・理由」を表す場合は、「から」でも「ので」でも用いられるが、主文と従属文はともに成立したことである場合は、「ので」が用いられやすい。



バスの後部座席

馬場 良二

コロンブスのアメリカ大陸発見が1492年だから、あれは1992年だったと思う。そう、結婚した年、前の年から準備していた出張だからということで、妊娠している家内を韓国に残して出発した。やはり1992年だった。コロンブスのアメリカ大陸発見から500年をキャッチの一つにして、ブラジル、リオ・デ・ジャネイロ連邦大学文学部で学会があった。

さすがリオ・デ・ジャネイロ、やるのが派手で、前夜祭までもうけてあった。リオ・デ・ジャネイロ市が位置しているグワナバラ湾のナイトクルーズだ。カクテル片手に夜風を受けながら軽くサンバでも踊ったに違いない。日本の学会と違って夫人同伴が多かった。私はサンパウロの知人を訪ねて行って参加できなかった。

中日（なかび）には、市長主催のカクテル・パーティーがあった。ホテルから観光バスで市長公邸に移動した。到着すると、長身の兵士が軍服の列でアーチを作り迎えてくれた。1978年に留学していたときに日本語のスピーチコンテストがひらかれた建物に違いない。ジャングルのような庭園に立つ石造りの建築だ。開け放たれた屋敷にあふれるほどの人々、胸の大きく開いたイブニングドレス、ボーイが盆にのせて運ぶ飲み物、食べ物は、またたく間になくなっていく。華やかな喧噪。

カーニバルがはじまった。9月だったと思う。2月の本番の時の衣装をバスに積み込み、踊り子と楽器奏者とが20人ほど、庭を練り歩く。私はまだ若かった。気恥ずかしくて、おりて行って踊ることができなかった。

と、夜の嵐がやってきた。レースのカーテンが舞い上がり、空が光り、雷鳴がとどろいた。熱帯の雨に濡れ、パーティーはお開き。現実とは思えないほどドラマチックだった。

サンパウロに行ったのは、ジェファソンに会うためだ。1978年から2年間、ブラジルはリオ・デ・ジャネイロに留学した。その数年前にリオを訪れた恩師が言っ

ていたとおり、リオは夢のように美しい街だ。輝く大西洋、白い砂浜、海岸沿いに幹線道路が走り、シャレた高層アパートが軒をつらねる。

リオでは連邦大学の文学部に在籍し、言語学や音声学の授業を聞いていた。知人の紹介で知り合った、日本語を学んでいる他大学の学生がジェファソンだ。学部の卒業式に出席し、段にあがったところを写真にとった。私が帰国してしばらくすると、日本政府の奨学生となって東大にやってきた。専門は農業政策だったと思う。博士まですすみ、帰国、当時はサン・パウロの東京銀行に勤めていた。

同じころ知り合ったのがネルマだ。ネルマもジェファソンも日伯文化協会日本語を勉強していたように思う。ネルマはリオの連邦大学、文学部を卒業し、ポルトガル語、つまり、国語の先生をしていた。驚くほど美人の三人姉妹+弟だった。

二人とはよく会った。三人で日本語の授業をしたり、ネルマと芝居を見に行ったり、ジェファソンと美術館に行ったり。よく話した。あの頃は、夢もポルトガル語で見えていたが、それでもブラジル人の言うことが100%分かっていたわけじゃない。でも、二人の話すことはすべてわかったし、言いたいことは何の苦もなくすべて伝えることができた。

ジェファソンはサン・パウロに引っ越していたが、ネルマはかわらずリオにいた。ネルマとはパオン・ジ・アスーカにのぼった。リオの観光写真には必ずと言っていいほどあらわれる小さな岩山だ。ロープウェイで頂上までのぼる。ジェファソンとは日本で会っていたが、ネルマとは丸々12年ぶりだった。

相変わらずだった。私は коммуニストだと言っていた。日本には必要ないが、この国には今、 коммуニズムが必要だ。当時、ブラジルの大統領はフェルナンド・コロールといい、不評をかっていた。若くて顔がいいから当選しただけだというもっぱらの評判で、経済は乱れ、未曾有のインフレだった。Tシャツを買おうとしたら正札に値段がない。札にある番号を値段表にてらし、その日の価格を知る仕組みになっていた。あまりのインフレに札に価格を書き込めないのだ。治安も悪化していた。途中よったニューヨークでは、グリニッジビレッジを夜、家族連れが散歩していた。なのに、リオではアパートの建物に鉄作が張り巡らされ、電動の門扉がついていた。大統領が国を食い潰したのだ。

リオの人たちは疲れていた。幹線道路をバスで走っているとき、後ろのバスに強盗がでたことがある。こちらのバスの誰かが気づき一瞬ざわついたが、すぐにみんな

な押し黙った。

映画を見ようと思ったが、ブラジルで作られたものがない。専門書もうすっぺらなペーパーバックになっていた。映画を撮る力も、本を印刷する力もないのだ。

インフレがひどいので先がわからない、計画を立てることができず、何もできない。本を買うか、髪を染めるか、お金がないからどっちかにしなくちゃならず、本を買った。髪には白髪がまざっていた。今もその薄っぺらな言語学の専門書が棚にのっている。

1980年、留学から帰国するときは、日本人の友人にまざってエレガントなお姉さんが見送りにきてくれた。出張からの帰りには、ネルマー人が空港まで来てくれた。

そのお姉さんかもう一人のお姉さんかはわからない。手紙には、ネルマがなくなったと書いてあった。何通もの手紙がゆきかった。何十年かの友情は素晴らしいとも。リュウマチの薬が強かったそうだ。

リオには日本人学校があり、サトウのおばあちゃんはそこの音楽の先生の身の回りの世話をしていた。ポルトガル語で言うならエンプレガーダだ。日系移民の一世で、御主人と二人で九州からやってきたという。留学中はずいぶんお世話になった。毎晩のようにその先生のところで夕飯をごちそうになっていた。つまりは、サトウのおばあちゃんが作ってくれていた。

社会に出て、熊本に赴任し、結婚もしましたと、会いに行った。コパカバーナのアパートに息子夫婦と住んでいた。先生と二人で贈った金縁眼鏡をかけていてくれた。陽射しのまぶしい通りにでると、ハンバーガーをご馳走してくれ、露店でピンクの輝石のネックレスを買ってくれた。今でも、頼まれて助産に行くという。ご主人なきあとは、エンプレガーダと産婆で生計を立て、子どもたちを育て上げたのだ。

父をなくしたのは高校3年になって間もなくの6月だった。体調が悪いと通院し、良くならないと病院をかえたら、すぐに入院、あっという間だった。

数年前の同窓会、高校のときの修学旅行の話が出た。修学旅行は高校3年の5月だった。宮崎のホテルのビリヤードで、慣れない球にねらいをつけた目がさだ

まらなかったのを覚えている。その時、団体旅行の出発にしたいが間に合わない夢、大きな旅館で自分の部屋に行きつけない夢を見る理由がわかった。同窓会以来、ほとんど見なくなった。あれは17になったばかりだったのだ。私はまだ子どもだったのだ。

入院していた病院は父の会社の近くで、家からはバス停までも遠かった。何年かたってから姉から聞いたのだが、そのバスの中、母は最後部のすみの席にすわり毎日泣いて帰ったという。

リオで最初のアパートはロータリークラブの紹介だった。リオではアパートの一部屋を間借りで人に貸すというのはごく多く、私もコパカバーナに居をさだめた。でも、大家とそりが合わず、知り合った日本人のところにころがりこんで、その日本人の知り合いが出た部屋に移り住んだ。そのアパートの持ち主がドナ・エディットだった。

ドナ・エディットは、ハンガリーの大きな農園に生まれ、歌姫だったという。ときどき昼下がりにピアノを弾きながらアリアを歌っていた。なくなったご主人は実業家で、水力発電の会社を経営していたそうだ。リオの大通りの名にもなっているヴァルガスというブラジルの父とも言える大統領とならんで映っている写真が飾ってあった。

かつては屋敷もあったし、アパートもいくつも持っていた。少しずつ売って、今は私に一部屋貸しているアパートがあるだけ。居間にはアップライトのピアノと豪華なシャンデリア。不思議なシャンデリアで、真夜中でも何かしらの光を壁に反射する。中国風の骨董のバー・ボックスも重厚だった。

すべてを売り払って養老院にはいるから、「ヨーッ、出て行ってくれ」と言われたのは1年もたたないころだった。ブラジル人にもハンガリー人にもアメリカ人にも「リョウジ」という発音はむずかしいらしく、みんな私を「ヨーッ」と呼ぶ。

街に用事をたのまれ、行って戻るとワニ革のでっかい女性用のバッグをくれた。これも売るんだとでっかいダイヤルビーの指輪を見せてくれたこともある。私が出て、ドナが順番をまだ待っているころ、たずねたことがある。シャンデリアを私の弁護士が500クルゼイロで持って行ったと言う。5000円だ。

用事があったから頼んだのではなく、バッグをやりたいから用事を作ったのだろうし、ダイヤルビーも高く売りたいからではなく、買える値段で分けたかったの

だろうと思う。活字の古めかしい年代物のタイプライターは、私が手紙を書けなくなるからと、売ろうとはしなかった。

一度、姪だという若い女性がイスラエルから遊びに来た。子どものころはかわいくてお尻にまでキスをしたものだと言う。子どもの頃はブラジルにいたのだろうか、それとも、ドナがイスラエルにいたことがあるのか。

ドナのうつつた養老院はユダヤ人のためのケア・ハウスだった。帰国前にたずねたことがある。緑につつまれた清潔で瀟洒な建物。こじんまりとした部屋には馬のたてがみがつめてあるというベッドがあった。腰にいいそうだ。そのベッドにすわり、ひざを気にする。足を床につくとひざが痛いので、このベッドの高さがいいと言う。

ケア・ハウスをおいとまするとき、ドナは玄関口まで送ってくれた。そして、両ほほにキスをして、「アテ・ローゴ（では、また）」と言ってくれた。

1992年、またドナを訪ねた。受付で部屋を聞き、廊下をすすんでいると、やってきた看護師が「私はお前を知っている!!」と言う。何やら写真で見たようなことを言う。案内された部屋は彼女の部屋ではなく、病室だった。白い鉄枠のベッドの枕元にはフレームに入った写真が一枚。結婚衣装をまとった家内と笑っている。ドナは私を見ると、「ヨーッ」と言い、そして、「Dodói」。診察中の医師は、股関節を痛め、ボルトをいれてあると説明する。Dodóiは、dor「痛い」の幼児語だ。

肉親も親せきもブラジルにはいないと言っていたが、サン・パウロには弟がいたようだ。

毎年クリスマスにはカードが届いた。そのカードはいつから途絶えていたろう。

養老院からの帰り、私はバスの一番奥の座席にすわり、エディットを思って泣いた。